



THE MAUREEN AND MIKE MANSFIELD FOUNDATION



## 「日米次世代パブリックインテレクチュアル・ネットワーク」プログラム 諮問委員/マンズフィールド財団理事 略歴

### 諮問委員

レナード・ショッパ

ヴァージニア大学ウッドロー・ウィルソン政治学部教授及び教養学部社会科学担当副学部長。1990年からヴァージニア大学で教鞭を執る。2000～2001年の間フルブライトリサーチ・フェローとして東京大学社会科学研究所及び国際基督教大学アジア文化研究所に在籍した。また1993～1994年の間、慶應大学総合政策学部で客員助教授を務めた。1984年ジョージタウン大学で学士号取得。1989年にオックスフォード大学で政治哲学博士号取得。

研究分野は日本の政治と外交。*The Evolution of Japanese Party Politics* (Toronto University Press, 近日出版予定)では、日本がどのように、そしてなぜ二大政党のうちの一つが小政党になり、新たな民主党という政党にとって代わられたのかを分析している。典型的な“硬直した”政党政治を持つ先進民主主義国において、このような変化が起こることは稀であり、日本の経験はどのような力が既存の体制を崩すことができるのかという問題に示唆を与える。

*International Relations Theory and East Asia* (Columbia University Press, 近日出版予定, David Kang と Ming Wan との共著)では、過去の東アジアの外交関係における主要な発展を振り返り、その発展が国際関係理論によってどの程度説明できるのか検証を行っている。国際関係理論がいかに実際の地域の経験に合致しているか検証することは、その地域における平和の維持と安定を保つために国際関係理論が適切な戦略を示せるかどうかを考えるにあたって有効である。

また過去の3つの単著は日本の社会・経済政策を形成している力について分析を行っている。1つ目の *Race for the Exits: The Unraveling of Japan's System of Social Protection* (Cornell University Press, 2006)は、海外直接投資によって製造業が日本を「退出」することを余儀なくされ、子供を持たないか、あるいは仕事を辞めるという決定を通して女性が「退出」することを余儀なくされた政策や構造を、なぜ日本はなかなか修正できなかったのかを分析している。2つ目の *Bargaining With Japan: What American Pressure Can and Cannot Do* (Columbia, 1997)は、日本の経済政策の立案に外圧が果たした役割について分析を行っている。そして3つ目が *Education reform in Japan* (Routledge, 1991)である。これら3つの著書については *International Organization*, *Comparative Political Studies*, *Journal of European Social Policy*, *Journal of Japanese Politics* などに掲載されている。

## シーラ・スミス

外交問題評議会(CFR)の日本研究上級フェロー。Intimate Rivals: Japanese Domestic Politics and a Rising China (コロンビア大学出版、2015年)とJapan's New Politics and the U.S. - Japan Alliance (CFR、2014年6月)の著者でもある。現在はアジアの戦略地政治における変化が日本の戦略にもたらす影響について研究している。2015年秋には「北東アジアのナショナリズムと同盟マネージメント」という新しいプロジェクトを開始した。

定期的にCFRのブログ「Asia Unbound」を更新しており、アメリカとアジアの主流なメディアにも出演している。日本、韓国、フィリピンの米軍に関する多国間研究チームを指導していたEast-West Centerに所属していたが、2007年にCFRに異動した。2007年から2008年に慶応大学の客員研究員として安部フェローシップの下、日本の対中政策を研究していた。さらに日本を代表する2つの安全保障・外交政策シンクタンク（日本国際問題研究所と平和・安全保障研究所）、東京大学、琉球大学で客員研究員として働いた。

現在、日米両国間の学識者を一堂に集めて両国間の文化・教育交流に関する諸問題を討議する日米文化教育交流会議(CULCON)の副委員長も務めている。さらにジョージタウン大学のアジア研究学部で教鞭をとっている。コロンビア大学政治学部で修士号と博士号を取得。

## マンスフィールド財団理事

### ジェラルド・カーティス

コロンビア大学政治学部バージェス記念講座教授、早稲田大学公共政策研究所客員教授、東京財団上席研究員を務める。

『政治と秋刀魚——日本と暮らして四五年』、*The Logic of Japanese Politics*、*The Japanese Way of Politics*、*Election Campaigning*、*Japanese Style*などを代表とする数々の論文や著書を日英で出版している。他にも世界中の新聞や雑誌のコラムにも登場する。日本語が堪能で、日本の日曜討論番組のレギュラーゲストでもある。

過去には王立国際問題研究所（ロンドン）、コレージュ・ド・フランス（パリ）、リークアンユー公共政策大学院（シンガポール）、慶応大学、早稲田大学、経済産業研究所、政策研究大学院大学、国際社会経済研究所に務めていた。

これまでに中日新聞特別功労賞、大平正芳記念賞などを始め、様々な賞を受賞している。2001年には国際交流基金賞、そして2004年には日本政府の最も名誉のある賞の1つである旭日重光章を授与した。

日米議員交流プログラムの委員長、ニュースウィークジャパンの特別アドバイザー、国際交流基金、日米財団、American Academy of Political Science の理事アドバイザー、朝日新聞の国際諮問委員会のメンバーとしての経験を持つ。現在はジャパン・ソサエティーと日本国際交流センターの役員、そして日米カウンシルの顧問を務める。学位としては、1968年にコロンビア大学から Ph.D.を取得している